

教育研究計画

① 研究主題

「よりよい学級・学校生活を創造できる児童を培う特別活動の実践研究」
～学級づくりを通して、自分事として問題解決に向かう児童の育成～

② 主題設定の理由

これからの未来を担う子どもたちが生きる社会は、人工知能の革新的な進歩により予測不可能な社会へと変貌を遂げてきている。内閣府（2016）は第5期科学技術基本計画の中で「Society5.0」と銘打ち、ICTを最大限に活用し、より豊かな世界を実現しようとする「超スマート社会」を世界に向けて発信しようとしている。しかし一方で、シンギュラリティなど、AIが人類を超えるような未来も提唱されている。このような社会に生きる子どもたちであるからこそ、AIには真似ができない資質・能力を子どもたちに培う必要がある。これらの資質・能力の育成は、今回の学習指導要領改訂でも示されている。

そこで本校では、特別活動、特に学級活動を中心にこの資質・能力を子どもたちに培っていく。では、これらの資質・能力を培うためには、どのような学びが必要であろうか。それは主体的で対話的で深い学びであると考えた。この学びから本校の子ども達の課題を考えたとき、これまでの子ども達の姿から、生活の中から課題を見出したり、生活をより良くするための提案を生み出したりする力が弱いと考えた。また、学級会などの話し合い活動でも、議題が自分事となっていないため、一つの意見に対して問い直したり再考したりする姿が少なかった。

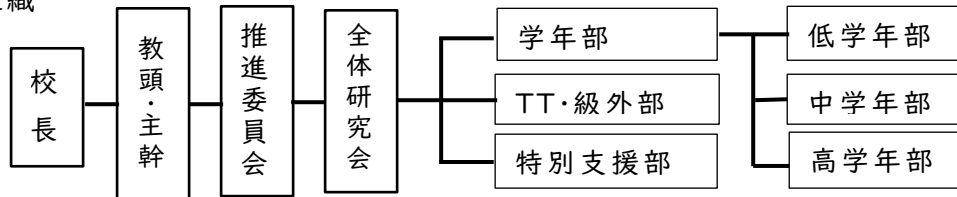
そこで本研究では、S-PDCAのサイクルを何度も回し、自分たちで解決する達成感を体験していくことで、子ども達が解決したい課題や生活をより良くする提案を自ら見出し、問題解決を主体的に行う姿を培うことができるのではないかと考え、本主題を設定した。

③ めざす子ども像

学校や学級の実際の集団生活の中から課題を見だし（主体的な学び）、「話し合い」を中心に他者の意見に触れ、課題について多面的・多角的に考え（対話的な学び）、実践を通して見方考え方を働かせて問題解決に向かう（深い学び）児童の姿

④ 研究組織及び研究計画

ア 研究組織



イ 研究計画

- 一つの課題について、一度の学級会で終わりではなく、学期や年間を通して、「課題・問題の発見→解決に向けた話し合い→実践→振り返り→新たな課題の発見や実践内容の修正」などのようにS-PDCAのサイクルで回していくことで、問題解決の過程が身につく、合意形成を図るための見通しをもつことができるようにしていく。
- 生活をより良くしていくための課題や新しい活動を生み出す提案などを扱う。（自分事として捉え、主体的に話し合い活動に臨む意欲の醸成）
- 特別支援においては、自立活動6区分のうち、「心理的な安定」「人間関係の形成」「コミュニケーション」に焦点を当て、情緒の安定や自己理解・他者理解を高め、よりよく学級作りに参画することを支援する。

⑤ 期待する研究の成果

子どもが自らの生活に即した課題や提案を扱い、合意形成を図りながら問題解決に取り組む経験を繰り返すことで、互いに協力して活動する良さを感じ、自分たちの生活をより良くするために主体的に物事に関わろうとする子どもを育むことができる。